

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ~LATIN JAZZ before 1960s~

~play list~

1. Spanish Tinge / Jelly Roll Morton
/ The complete library of congress recordings by Alan Lomax / Rounder 11661-1898-2 / 1938
2. Creole Love Call / Duke Ellington and his Orchestra
/ The complete RCA Victor Recordings (1927-1973) / RCA D9026-63386-2 / 1928
3. El Manicero / Don Azpiazu's Orchestra / Don Azpiazu / Harluquin HQCD10 / 1930
4. The Flaming Sword / Duke Ellington and his Orchestra
/ The complete RCA Victor Recordings (1927-1973) / RCA D9026-63386-2 / 1940
5. Paella / Machito and his Afro-Cubans / Relax and Mambo / Living Era CD AJS5602 / 1942
6. El Golpecito / Julio Cueva y su Orquesta / La Butuba Cubana / Tumbao TCD-032 / mid1940s
7. Tanga / Machito and his Afro-Cubans / Relax and Mambo / Living Era CD AJS5602 / 1949
8. Manteca / Dizzy Gillespie and his Orchestra
/ The Complete RCA Victor Recordings / Bluebird 66528-2 / 1947
9. Tuxedo Junction / Tito Puente and his Orchestra / The Complete RCA Recordings / BMG78911-2 / 1950
10. Vibe Mambo / Tito Puente and his Orchestra / The Complete 78s vol. 1 / Fania 773130389-2 / 1950?
11. Tiempo de Cencerro / George Shearing Quintet / EMG-10 (MGM-EP-583) / around 1953
12. Bernies's Tune / Cal T'Jader Quintet / Los Ritmos Calientes / Fantasy FCD-24712-2 / 1954
- 13, 14. Un Poco Loco / Bud Powell / The Amazing Bud Powel / Blue Note 32136 2 / 1951
15. Message from Kenya / Horace Silver Tiro - Art Blakey and Sabu Martinez / Blue Note BLP5034 / 1953
16. Afrodisia / Kenny Dorham / Afro-Cuban / Blue Note 5065 / 1955
17. Nica's Dream / Sabu / Jazz Espagnole / Alegre LPA802 / 1961?
18. Con Poco Coco / Bebo Valdes / Descarga Caliente / Caney / 1952
19. La Mulata Rumbera / Peruchin / El Marques del Marfil / Tumbao TCD314 CD0184 / 1959
20. Gandinga, Mondongo y Sandunga / Grupo Cubano de Musica Moderna / Yemaya YY9136 / 1962
21. Malanga / Mark Weinstein / Cuban Roots / Bomba BOM24078 / 1967

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ～LATIN JAZZ before 1960s～

1920年代
ソンの確立

1940年代
ソンのコン
ラント化

1951年
チャチャチャ

1956年ころ
デスカルガ

1960年ころ
パチャンガ

ムシカ・クバーナ

1930年代
ルンバの流行

1947年ころ
アフロ・キュー
バン

1950年ころ
NYマンボ

1955年ころ
NYチャチャチャ

ニューヨーク・ラテン

1920年代
ハーレムの
スタイル

1930年代
スウィング

1947年ころ
ビ・バップ

1954年ころ
ハード・バップ

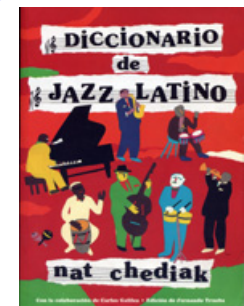
1959年ころ
モード

USジャズ

1920年代
ニュー・オーリンズの
スタイル

1949年ころ
クール

cf: *Diccionario de Jazz Latino*
Nat Chediak
SGAE
ISBN 84-8048-262-1



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ～LATIN JAZZ before 1960s～



1. Latin Tinge



2. Creole Love Call

4. The Flaming Sword



Jazz in the 1920s in the USA

ニューオーリンズを発祥の地とし、ニューヨークやシカゴなど発展しつつあった大都市へとジャズは広がっていった。冠婚葬祭の音楽あるいはダンス音楽として産声をあげたが、エリントン楽団は鑑賞する音楽としてのクオリティ向上を成し遂げた。

ジャズは、カリブ音楽の一部であるとされるが、USAのジャズにしても、キューバのソンにしても、特長的なスタイルの確立は1920年代であり、アフリカやスペインの文化の種が、カリブ海を経由してアメリカ大陸に到達したと考えるべきであろう。

ジェリー・ロール・モートンの「ラテン・ティンジ」(過去を振り返って録されたのが1938年)は、ブルーズとスペインのフィーリングが混じった曲だと説明されている。ここにはハバネラのリズムや三連系のリズムはない。

エリントン楽団のラテン要素は、「テイク・ジ・アトレイン」の共作者としても知られるプエルトリコ出身のファン・ティソール、あるいはジョー・ナントンの存在が有名だが、特にリズム形式としての影響はあまりない。いかにもな『クレオール・ラヴ・コール』も4ビートで典型的なハーレム／ボードビリアン調。ラテン要素が明確に現れるのはコンガ「フラミンゴ・ソード」が最初であり、以降も多くはない。

エリントン楽団のレコーディングで演奏精度と音の良さがバランスした名盤としては、コロビアの『マスターピース』(1950年12月録音)とRCA『ザ・ポピュラー』(1966年5月録音)がお勧め。『マナー・ジャングル』(1962録音)はピアニストとしての姿を捉えたトリオ名盤。1968年には『ラテン・アメリカ組曲』も録音した。



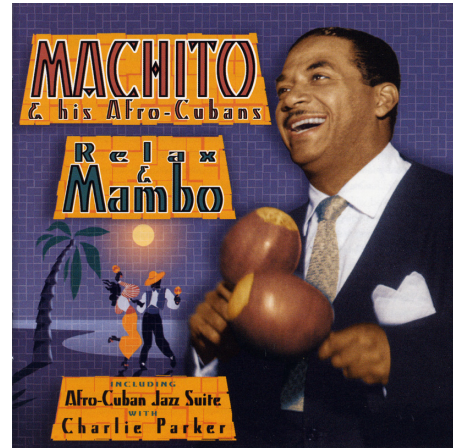
cf: *Latin Jazz*
John Storm Roberts
Schirmer Books
ISBN 0-02-864681-9

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ～LATIN JAZZ before 1960s～

Rhumba in the 1930s in the USA / Cuba



3. El Manicero



5. Paella



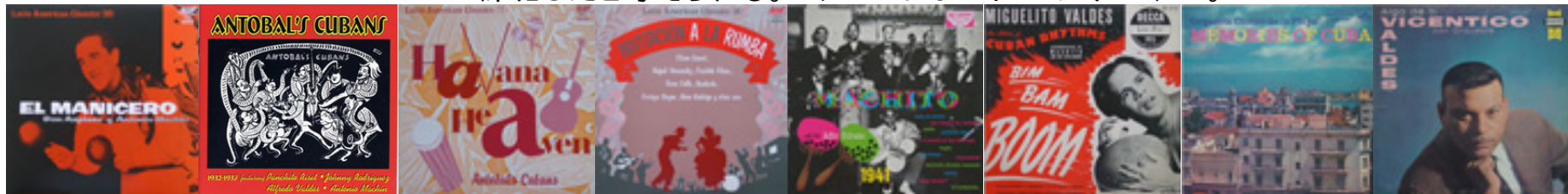
6. El Bolpecito



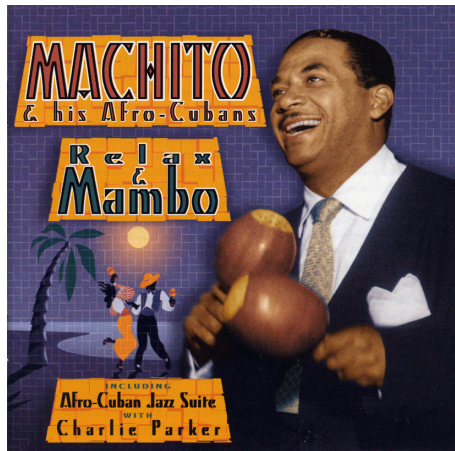
cf: なんだかんだでルンバにマンボ
中村とうよう ミュージック・マガジン

ドン・アスピアスー楽団の「エル・マニセーロ」(モイセス・シモンズ／マリオン・サンシャイン作)は1930年NY録音。すでにオーケストラ編成でクラベを取り入れているので、ソンの拡大化というよりは明らかにジャズ・バンド(キューバではビッグ・バンドのような管楽器編成を示す)がソンを取り込んだと考えるべき。なお、渡米間もないマリオ・バウサーが一週間でトランペットをマスターして録音にこぎつけたとする資料もあるが、本盤ライナーでは、トランペットはフリオ・クエーバとされている。マチート楽団の最初期、1942年録音「パエージャ」(編曲ピン・マデーラ)はルンバ然とした演奏。

クエーバ楽団の40年代の録音はトゥンバオ盤で明らかになった。アルセニオ・ロドリゲス楽団のようなソンのコンフト化ではなく、ビッグ・バンドのソンの取り込みが深化したと考えられる。ピアニストはレネ・エルナンデス。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ～LATIN JAZZ before 1960s～



7. Tanga



8. Manteca

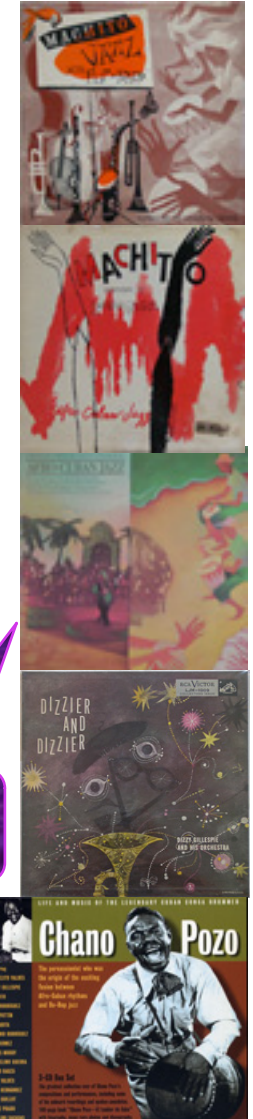
The Birth of Afro-Cuban Jazz in the 1940s in NYC

ラテン・ジャズの古典といわれているのが「タンガー」。1943年マリオ・バウサーの作曲だが、マチートらが徴兵中であつたためか、当時の録音はなく、48年頃のライブ音源などで聴くことができる。このマスター・テイク(パート1 & 2ではなく、完全に繋がっているが…)は50年録音。ラテン・パーカッション・アンサンブルとジャズ・ビッグ・バンドの音楽的融合が完全に出来上がっていることが判る。

ビ・バップ推進者のひとりディジー・ガレスピー(1917年生まれ)が、キューバからやってきたコンゲーロ・チャノ・ポソのアイディアを取り入れたのが「マンテカ」。トゥンバオと裏にアクセントを持つベース・リフを取り入れたガレスピー型アフロ・キューバン・ジャズ最初の曲(1947年録音)にして代表曲。ベースはアル・マキボン。1948年12月にチャノが射殺されるまでに、数々のライブ録音がある。なお、チャノの後任がサブー・マルティーネスである。

ここで対比させたいのは、ラテン・パーカッション・アンサンブルを導入しているか否か。ダンスブルな前者がNYマンボの礎になった。前者のスタイルが、その後のジャズ・シーンでのラテン・パーカッションの見本のようになったか？

Norman
GRANZ!



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ～LATIN JAZZ before 1960s～

Norman
GRANZ!

Machito's Rhythm Section into Jazz Field around 1950



Mambo Instrumental by Tito Puente around 1950



9. Tuxedo Junction

ティト・プエンテのRCA第一期録音には、「タキシード・ジャンクション」「テイク・ジ・アトレイン」が含まれている（ティコには「キャラヴァン」）。つまりジャズ・チューンのマンボ化。前者はグレン・ミラー楽団のヒット曲だったが、TP楽団の洗練された演奏が素晴らしい！

革新者TPの功績のひとつがヴィブラフォンの導入。おそらく最初のレコーディングはシーコ盤「ポール・トゥ・アモール」だが、ここではヒットした「ヴァイブ・マンボ」を。セルフ・カヴァーも良いが、壮絶なカル、ポップなヒルトンなど多彩なアレンジあり。



10. Vibe Mambo



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ~LATIN JAZZ before 1960s~



11. Tiempo de Cencerro



12. Bernie's Tune

Mambo gets vibe around 1950 at East / West Coast

1919年イギリス生まれのピアニスト:ジョージ・シアリングが、自己のクインテットにヴァイブを導入したのは単にメンバーの都合だったようだが、ピアノ&ヴァイブのユニゾンによるクールな響き、「セプテンバー・イン・ザ・レイン」のヒットで軌道に乗った。初期のヴァイブ奏者はマジョリー・ハイアムス。日本編集の『九月の雨』は1949年2月~50年7月のNY録音をクロノジカルに編集したものでラテン・ナンバーはない。カル・ジェイダー(1925年セント・ルイス生まれ)の参加は1953年(デイヴ・ブルーベック3からの移籍)で、状況的にはカルの参加がシアリング5のラテン化／コンボ化を促したことになるが…。「ティエンポ・デ・センセーロ」はおそらく未LP／CD化。

カル・ジェイダーが独立した最初のバンドはトリオで、頻繁に替わったピアニストのひとりがヴィンス・グアラルディ。いわゆるラテン5の設立は1954年サン・フランシスコ／ロス・アンジェルズで、カル、アル・マキボン、アルマンド・ペラーサ、リチャード・ワイアンズ、ジェローム・リチャードソン。「バーニーズ・チューン」はそのときのレコーディングだが、ピアノはエディ・カーノがオケイジョナリーに担当している。後にアルマンドはシアリング5へ、TP楽団からモンゴ・サンタマリーアとウィリー・ボボがジェイダー・バンドに移籍する。70年代以降のコンゲーロがポンチョ・サンチェス。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ~LATIN JAZZ before 1960s~

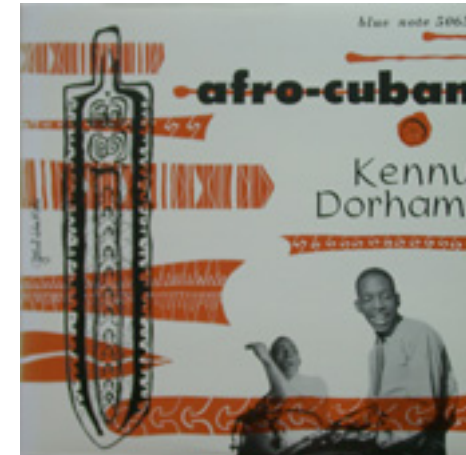
Hard Bop Era: Latin Beat in Jazz in the 1950s



13, 14. Un Poco Loco



15. Message from Kenya



16. Afrodisia

ハード・バップ誕生の記念碑的なアルバムはアート・ブレイキー5の『A Night at Birdland』(1954年2月)であるが、その前後のコンボのレコーディングから、ハード・バップ成立におけるラテンの影響を考えてみたい。バードランドとパレイディウムは目と鼻の先にあり、ホレス・シルヴァーがTPのステージをよく観ていたというのは有名な話。

「ウン・ポコ・ロコ」(51年)では、マクス・ローチがカスカラにトライしている様子がテイク違いで確認できる。シルヴァーはトリオで2枚、クインテットで2枚の10インチLPをキャリアの初期に録音しているが、セカンド(53年)では自己名義のアルバムにも関わらず、ブレイキーとサバーのデュオ「メッセージ・フロム・ケニア」を収録。カンディド、チャノ、モンゴ、アルマンドに活躍に刺激されたか、パタートが鳴り物入りでニューヨークにやってきたのが54年。最初の大物セッションがケニー・ドーハムとの4テイク(55年)。鬼気迫るパフォーマンス。ブレイキーはパーカッション求道者。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ~LATIN JAZZ before 1960s~

Finally 4 beat + tumbao makes the style

ハード・バップ～ファンキーがジャズ・メインストリームを占めた50年代後半～60年代初頭は、4ビート+コンガ(トゥンバオ)でラテンのフレイヴァーをだすレコーディングが結構あった。とりあえず50年代諸作からピックアップしてみた。左からカンディド、フランク・コローン(ボンゴはマニー・オケンド)、レイ・バレット、パター。パーカッションはラティーノの専売特許となり、ジャズ・メインストリームのオースタイルとなった。



Latino mixes Hard Bop voicing with Latin Beat

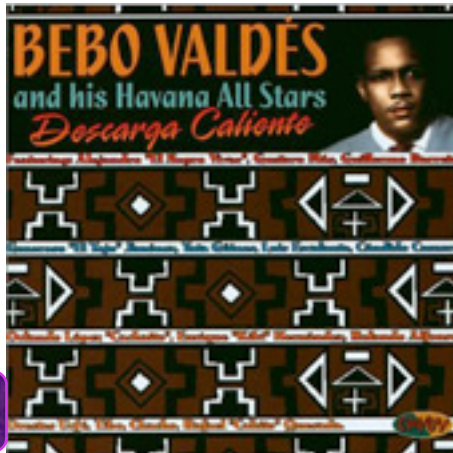
ハード・バップ～ファンキーに対するラテン・サイドのアプローチのひとつが、このアルバム。60年代にかかってしまうが、そこはご愛嬌。トランペット: マーティ・シェラー(おそらく兼ディレクター)、アルト・サクソ: ボビー・ポルセーリ、ティンバーレス: ルイ・ラミーレスらによる2管セクステット。「ニカズ・ドリーム」はシルヴァーの代表曲。シルヴァー5のパフォーマンスにはラテンとゴスペルが溶け込んでいる。



17. Nica's Dream

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ~LATIN JAZZ before 1960s~

Jazz in Cuba in the 1950s



Norman
GRANZ

18. Con Poco Coco



ベボ・バルデス(1918年生まれ)は、キューバ楽団などを経て40年代にトロピカーナのピアニスト(ガレスピーらキューバ遠征に対応した。音楽監督はアルマンド・ロメウ)として活動、52年に自己のサボール・クーバを設立した。バタンガと呼ばれるリズム(ピアノ・リフ?)の考案者。アンドレス・キューバン・オールスターズ名義の52年録音。

ペルチーンことペドロ・フスティス(1918年生まれ)は、キューバを代表するビッグ・バンド:オルケスタ・リベルサイやベニ・モレーのバンダ・ヒガンテのピアニスト。このセッションは、リベルサイの59年USA公演の最中にピックアップ・メンバーでの録音。

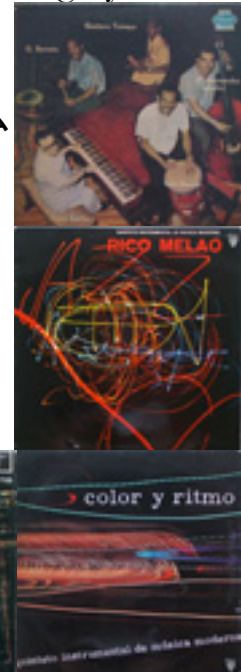
フランク・エミリオ・フリン(1921年生まれ)。独自のタイム感とトーンで、60年代以降のキューバン・ジャズの方向性を決定づけた。「ガンディンガ～」は62年録音の代表曲。



19. La Mulata Rumbera



20. Gandinga, Mondongo y Sandunga



by YAMAMOTO Takahiro on Sep. 7 2008

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ～LATIN JAZZ before 1960s～



Copyright: マンボラマTokyo

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄6 ~LATIN JAZZ before 1960s~



21. Malanga



Up to Nowadays

ジェリー・ゴンサーレスによれば、いわゆるラテン・ジャズはマチート+チャーリー・パークーすなわちマンボであると。フォート・アパッチ・バンドが目指したのは、ルンバのビート・アンサンブル+ジョン・コルトレイン。フォート・アパッチの音楽的完成度は凄まじく高いが、1967年に先例がある。エディ・パルミエーリやラリー・ハーロウのコンボへも参加したトロンボーン奏者マーク・ワインスタインの『キューバン・ルーツ』である。「マランガ」がその典型例。ウィリー・ナガサキもリーダー・アルバムで取り上げた。

ラテン・ジャズはニューヨークだけでなく世界各地で演奏されている。キューバン・ジャズも独自の深化をみせ、ダビード・サンチェスらはボンバ／プレーナとの融合にチャレンジしている。そういうわけで、「マランガ」を予告編として次回は60年代から再開。

Advanced Reference Guide



河村要助著
福音の書



東琢磨監修
1995年刊行
のガイド



タイトルどおり
ミュージシャンの
発言集



キューバ
音楽事典